

シニアの10人がガイドレスで米国はマウント・レーニアへ



(カスケード山脈の主峰 4,392m、日系人にタコマ富士と呼ばれたマウント・レーニア峰)

2016年7月下旬から8月初めにかけてシリウス会員10名が爽やかな気候のアメリカ西海岸シアトルの国立公園マウント・レーニアで登攀を目指し、その後にオリンピック半島にある国立公園をトレッキングしてきました。

遠征期間 : 2016年7月19日～8月2日

パーティメンバー : 赤澤、大塚、河内、斎藤幸子、斎藤光子、迫畑、塚本、西田、古林、星野 以上10名

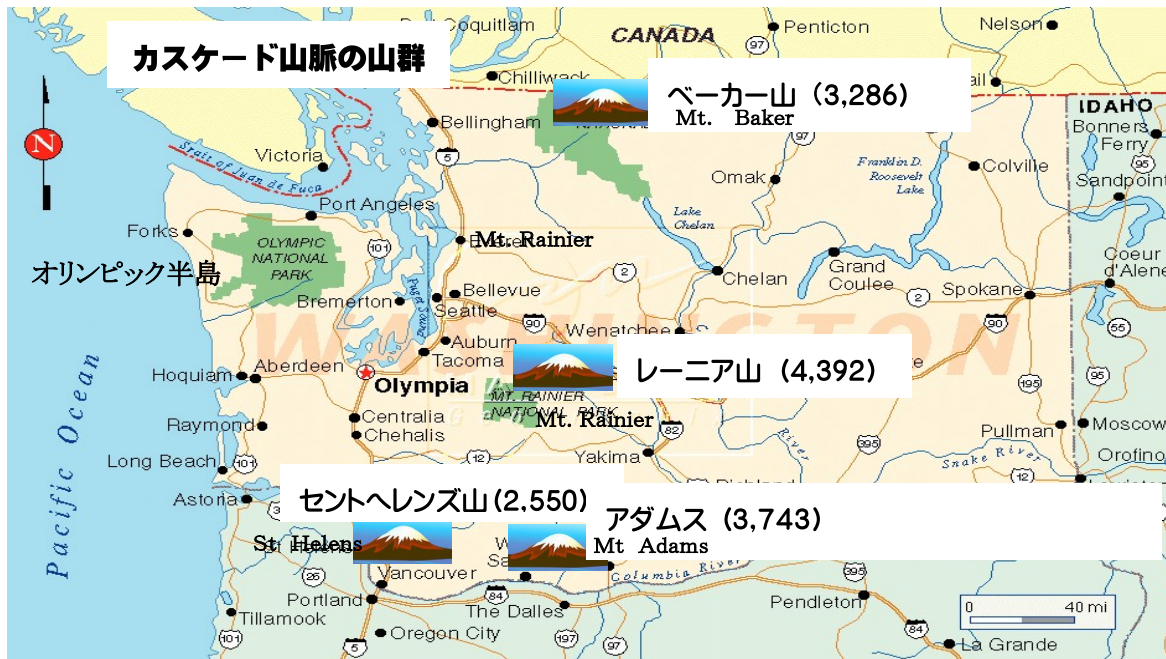
■ 経緯：レーニア山というところはどんなところか、なぜ行くことにしたのか 古林 宏

シリウスの海外山行としてはこれまでに過去7回を数えている。もう今年が最後だと言いながら毎年、年末ごろになると来年はどこに行こうか、という話が始まって、これが最後だから見納めにとか、これを‘登り納め’という話の流れで、新しい選定が始まることになる。北米のレーニア山はこれまでも何度か候補に挙がっていたがその都度、その困難さと早期の準備が無いとガイドやテント場、それにロッジなどの宿舎の手配が間に合わないと言った困難さが理由で見送られてきた経緯がある。

NHKのテレビにレーニア登山の様子が紹介されることがあった。それまでは、この山は見るのは良いがとても我々の力量では登頂は無理だろうと考えていたものだ。しかし映像で紹介されたコースを見てみると、年間1万人が登っているだとか、一般ルートでは1泊2日で帰って来る人達の姿を見るに及んで、これは何とかかなりそうだと考えるようになって来た。山の周辺にはお花畑が一杯のトレッキングルートがあり、その映像にも誘われる形となった。その一方で、レーニア山は全米で一番クレバスの多いところであり、氷河の数がなんでも25所もあるという話である。そんなところにガイドレスで登れるのかと不安だったが、いや、これが最後だからという決まり文句でのトライアルとなった次第。

■ カスケード山脈とオリンピック半島

アメリカの西海岸を太平洋に沿ってロッキー山脈に平行したカスケードという山脈が南北に走っている。丁度、日本とは太平洋を挟んで向かい合う形での環太平洋造山帯山脈群である。その山脈には多くの火山があり、今回のレーニア山を最高峰にセント・ヘレンズ、アダムス、フッド、ジャスタ、ベーカーなどが名を連ねている。



レーニア山から2時間ほど空港の方に足を戻して、そこから海岸線沿いにオリンパス山のあるオリンピック国立公園に行くことができる。レーニア山を登った後に海岸に面した美しい丘陵地帯であるオリンピック半島を訪ね、温帯雨林の多様な植生に触れて見たいものだと考えた。

1月に入ってO氏がネットで検索をすると、レーニア山では既に7月のテント場の予約がほぼ埋まり始めており、ガイドの方はというと2対1の組合せは認めず、1グループは8人が条件だとか、アメリカ人との混成になるとか、条件的には我々にはとても合いそうに無い様子で、ガイド登山は諦めざるを得ない状況だと判明した。従って予定としては、テント泊を主体にして出来るだけ費用をかけずに自前の手作り登山でチャレンジしようという計画を立てることになった。

目標は決まったので山行企画を作成するに当たってはピークハントをするチームと、レーニア山周辺のハイキングを楽しむメンバーの、2班に分かれて編成をすることにした。レーニア山を選択した動機のひとつにはその山麓周辺に優れたトレッキングルートが豊富にあり、芳醇な雨に恵まれた高山性の植生が広く点在しているという点にもあったので、無理をして登頂を目指すよりはお花畑をエンジョイすることの方が良いのだと分かっているのだが、心と体は迷走して登頂トライ班とトレッキング班の2班に分かれることとなった。

シアトルにあるタコマ空港からハーツ社のレンタカーを借り、いきなり左ハンドルでのドライブでアメリカの高速道路に入ることとなった。慣れない左ハンドルにナビゲーターが懸命に声を掛けながら2

時間ほどでロングマイアーに到着し、登頂組はそこでベースキャンプを設営することにし、トレッキング班は予約したロッジに入って、さて、いよいよのスタートとなった。

■ マウント・レーニア敗退記

赤澤東洋

7月21日（木）、遂にMt. レーニアに登る日を迎えた。日本を発って3日目、登山基地のパラダイス上空は青空が広がり、絶好の登山日和だが、富士山の倍以上あるように見えるどっしりと大きな山容のレーニア山山頂は厚く笠雲に覆われその暗雲が気にかかる。

登山班は、F、O、T、K諸氏と私の5名、各自22～25kgという荷がズシリと重く、まず駐車場での出だしから皆よろけてしまう有様で先が思いやられた。

かつて若かりし頃、勤務先の研修で50日程滞在したシアトル市から晴れた日には富士山のように仰ぎ見ていたレーニア山、あれから46年、まさかあのタコマ富士に登る日を迎える事になるとは夢のようだった。

年明け早々今年の海外山行はレーニア山と決定し、10名のメンバーも決まって2月初めに航空機の手配等渡航準備完了、何回かの打合せ会合や富士山での雪上訓練・高度順応等事前トレーニングもやれる事はやって万全を期して漸くこの日を迎えたのである。

7時30分、明るく開けた標高1,650mのパラダイス出発、果敢に第一歩を踏み出した。日中はハイカーや観光客達で満杯となる駐車場だが、さすがにこの時間帯ではまだ人影はまばらだ。歩き始めて間もなく標識を見誤り少し戻る。そのまま突き進んでも2,100m地点のパノラマポイント付近で合流するらしいが遠回りになるので先行する皆を呼び戻す。ホンのわずかなロスだったがFさんの歩みが途端に遅れがちとなり、それにつられたかOさんも同調、この時点で全員一緒での行動は無理と判断したリーダーのOさん、これからは別行動とし各々マイペースで歩く事にしようと言う。先頭のKさんは一番お元気で重荷もなんのその、しっかりした足どりでその後最後までずっとトップを譲る事はなかった。体調も良さそうでなかなかの健脚だ。

舗装されたトレイルの両脇にはレーニア山を代表するアバランチリリー（雪崩百合）が咲き乱れ、トレッキングならその清楚な群落に歓声を挙げルンルン気分で走り出したい位になる所だが、我が隊はカメラを構える余裕もなく重荷に喘ぎウンウン唸るばかり。ベンチが設置された休憩場で荷を下ろした方がいいが、立ち上がる時に又一苦労、まったく情けないこの非力。舗装はここまででその先からは小石を敷き詰めてよく整備された遊歩道となった。幅は2m程あり斜度も緩やかで歩きやすく、ニスカリー氷河を正面に見ながらゆるゆると行く。右手前方の雪の台地の遥か向こうに今日のテン場に近いAnvil Rockが見える。近そうに見えるが五合目から仰ぐ富士山頂の大鳥居と同じで相当な時間がかかるに違いない。高山植物の咲き乱れる草原の中に青空へと真っ直ぐに伸びる針葉樹の疎林、その先には荒々しいニスカリー氷河を抱く雪のレーニア山、そのコントラストが見事な庭園のような遊歩道でこの辺りはGlacier Vistaと呼ばれているらしい。



背後を振り返るとレーニア山と同じように白雪を頂く大きな山が見える。後から来た地元の人らしい若者に聞くとマウント・アダムス（3,751m）との事で、その右手に見えるのがセント・ヘレンズ（2,950m）、もう少し登るとマウント・フッド（2,950m）のピークも見えますと云う。わがバカチョンカメラでは上手く撮せそうもないが、この景色を見ただけでも来た甲斐があったというものだ。高度もそれなりに稼いだようで、登山口のパラダイス方面が見下ろせたが、後続のFさん、Oさんらしき姿は見えない。常に安全登山を心掛けているお二人の事だ、このまま登っては危険と判断したら、潔ぎよく撤退されるに違いないと思い、もう気にしない事とする。雪渓を詰めて行くと氷河の先端なのか、ヒマラヤ壁のような幾筋もの割れ目のついた斜面となり、丁度左から大きく回り込むTさんが見えたのでカメラを出す。その雪壁のトラバースは足場も悪く慎重に乗っ越したが、Hairpin Switchbackと記されている箇所ようで、ここもスカイライントレイルの順路の内で、日本だったら一般ハイカーは立入禁止となるだろうなあと思う。山はすべて自己責任ですよというお国柄ということだろう。

更に進むと間断なく雪渓が現れる雪道となり、パノラマポイントへの標識を右に見て左に折れるとこれから向かう大雪原が目の前に広がって見えてきた。200メートル程先にTさんの後姿も見えたが、Kさんはさらにずっと先のようだ。

11:30 Pebble Creek 着。小石の沢という意味だろう。標高2,200メートル。登山口より丁度4時間、先人の登頂記録では標準タイム2時間位らしいので、4時間ではあまりにかかり過ぎ、前途は多難だ。沢幅は2メートル程で飛び石伝いに流れを渡る。ここは最後の水場で一口飲んでみたが、冷たくて美味しい水だった。沢を渡ってすぐの短い急登を這い上がると、いよいよそこから大雪原となりミュアスノーフィールドとなった。ここからが本番だ。

この辺りから後続組にどんどん抜かれるようになった。結構人出は多く、10名位の団体も何組かある。パラダイスを9時頃出発したパーティだろう。我々の荷が極端に大きいという事でもなく、皆さんも結構大きなザックを背負っているのに、足どりは軽やかだ。

こちらは重い荷に喘いで相変わらずヨタヨタと進むばかり、天気がいいのでなんとか持ち堪えているだけである。露出した岩場でTさん、Kさんが休んでいるのが見えてきたが、こちらの到着を待たずに立ち上がって歩き出している。姿が確認できたのでそれでヨシとしたのだろう。多分相当待っていていたに違いない。私もその場へ辿り着くとザックを放りだし休憩。パンを嚙り、雪の状態からその必要はないのだが、ここでアイゼンを着けた。何とか少しでも荷を軽くしたい為だ。スキーヤーやボーダーが気持ちよく滑ってくる大斜面だが、斜度は緩く下山者が尻セードをしているが、思うようには滑らない様子がみえる。富士山のように一気に高度を上げる山ではないという事で、それだけ大きな山容という事だろう。6年前のムスターグアタを思い出した。

14時頃、案じていた天候が悪化しガスってきた。本来ならもう着いて無ければならない時間帯、リーダーのOさんが色々調べてキャンプ・ミューアではなく、その手前の雪原で幕営と決めてくれたのに、テン場はまだまだ先のようなのだ。下手打って自分でツキを見放してしまう我がへボ麻雀同様に、モタモタと時間ばかりかけてしまい折角の晴天を上手に活かせなかったようだ。とうにキャンプ・ミューアに到着した連中はきっと「今日は又とない晴天に恵まれたいい1日だった」と山行記録を書いているに違いないのに。この差はあまりに大きい。

崩れ始めると山の天気はアッという間だ。視界が途端に悪くなり冷え込んでくる。斜度を増した雪面を一步、一步と高度をあげていくと右手の露岩帯にTさん、Kさんが待っていてくれた。多分30分以上待っていたのではと思う。軟弱で足を引っ張ってしまい本当に申し訳ない。視界は50m程で、もうそろそろテン場に辿り着きそうなものだが、それらしき平地が見えてこない。不安になって下ってきた数人パーティのガイドに尋ねるとキャンプ・ミューアまではあと1時間半位、雪原には決められたテン場はないのでどこに張ってもいいが、ゴミは持って帰れという。露岩に沿って平地を探すが傾斜がきつくさらに上へと歩むしかない。時間は16時を過ぎ、とてもキャンプ・ミューアまでは辿り着けそうもなく、とにかくどこか探さねばと再び後から追いついてきた数人パーティのリーダーに聞くと、Anvil Rockの下まで行けという。数十m先を行くKさん、Tさんにその旨伝えて右手の露岩帯の先で適地を探してもらい、岩場の先のわずかな平地をテン場とした。テントを張った形跡があり、風除けは無いが良さそうだ。時刻は16時30分、本日の歩行時間は想定を遥かに超える9時間に及びもうこれ以上は到底無理というもの、限界だ。各々マイテントを張り終わる頃には完全なホワイトアウトとなり、滑り込みセーフ、ギリギリだった。



風が出てきて、3年前にカナダで買った1人用テントは自転車等の平地用でスカスカ、風がそのままテントの中を通り抜けていく。出発前その点は気になったが今更テントを購入する気になれず、持参したダウンの上下を着込んで寒さ対策整え、まずは雪を融かして水を作り尾西の赤飯食べて早めに就寝とした。勿論アルコールは無しだ。ところがうとうとしたと思う間もなく21時頃より風が強くなりおちおち寝ていられなくなった。頂上から吹き下ろす風はまともにテントを襲いテントごと吹き飛ばされるのではと数年前にあったF1レーサー片山右京氏の富士山遭難事故を思い出してしまい気が気ではない。ごーっという音と共に間をおきながら襲って来る突風に激しく揺れるテント、身体ごと押しつけられ、時には浮き上がり持って行かれそうになり、中から必死に身を以て支える。しっかりと竹ペグを雪の中に埋め込んで、張り綱もいつもより増やして張ったのだが、様子を見に行く事も出来ない。67kgの身体全体を重しとして踏ん張っているからこそ飛ばされないのだと思えば、無闇に外へ出ていくわけにはいかないのだ。一睡も出来ず風に翻弄される事3時間程で、何故か急速に風が収まり、日が改まるころには星が見えるようになった。正にやれやれだった。飛ばされなかったのはスカスカテントで風が通り抜けたのが功を奏したのかかもしれないと自嘲する。



翌朝は 5 時半起床。夜中には星も見えたのにガスっていて、その内に雪が降り出し、大粒のボタン雪がテントに吹き付けてきた。もうこれ以上重荷を担いでいく元気もなく、計画を変更し今日は軽い荷物で行ける所まで行って戻ってこようという事にした。

7 時、とりあえずキャンプ・ミューアを目指して出発。新雪で昨日のトレースは消えてしまいルートは判然としないが、とにかく上へ、上へと目指す。雪は止み少し明るくなり Anvil Rock が視界に入ってきた。岩の基部に大型テントが 2 張り張ってある。ガイドパーティだろうか？ ルートが判らずそのまま直進すると、雪原はその先で崖となりコウリツ氷河に落ち込んでおりガックリくる。頂上を目指すわけでもないの、「迷ったおかげで氷河見物が出来たね」と写真を撮って少し戻りかすかな踏み跡を探し出した。



8時35分キャンプ・ミューア到着。天気は急速に回復し青空も見えてきた。15張り程のテントが張られており、ガイド小屋やトイレもあって出入りする人影も見える。コウリツツ氷河が広がる先には、カテドラル・ギャップが見えたので、とにかくあそこまで行ってみようとなった。テント場の先の雪原には大小様々な岩が転がっていて落石の多い所のようなのだ。ぐずぐず出来ないで急いで落石帯を通り過ぎるとコウリツツ氷河となり、間もなくして不気味な切れ目のクレバスが出てきた。一応ロープは持参していたが、又してもガスってきたので今日はこれまでとしてテントに戻る事にした。この判断は正解だったようで、みるみる内に視界が悪くなり小雨も降り出す始末でホワイトアウトの中でテントを探すのが大変だった。折角登ったのだから、もう一晚山の中で過ごそうかという声もあったのだが、昨晚の強風体験はもうこりごり、直ちに下山しようと衆議一決し荷物をまとめて早々に下山する事とした。視界は40〜50㍎、登りに9時間かかったコースだが、下りは丁度4時間、16時に無事パラダイスに下山し、キャンプ場のクーガーロックに戻ると折からBQの準備中の留守部隊は早い下山に驚きを隠せない様子ながら、無事下山を歓迎され、差し出されたホロ苦いビールがことの他美味しいのだった。この日は下界も雨だったようで、翌日もレーニア山の頂上は雲に覆われていたので、早めの下山は正解だったと云えよう。

尚、シアトルへの復路は往路をとらずにグルッとレーニア山を一周してきた。46年前、シアトル滞在中にスキーに連れてきてもらったクリスタルマウンテンの再訪を期してのことで、折角のレンタカーなので皆をご案内したいものと秘かに狙っていたのだ。幸いに雲一つ無い晴天に恵まれロープウェイで登った頂上で、Mt.レーニアを初め数年前にFさんが登ったMt.ベーカーまで360度の展望を愉しむことが出来、皆にも喜んでもらえわが目論みは大成功、案内した甲斐があり嬉しかった。

[総括]

かような次第でMt.レーニアの頂上に立てなかったのは誠に残念だったのだが、悔しい気持はあまりなくサバサバしている。

リオ五輪陸上女子200㍎で予選敗退の福島千里選手は「やるだけの事はやって挑んだ結果がこれ。今更ああしておけば、こうしておけばというものはない。これが今の実力」とサッパリしたものだった。わが心境もまさにその通りというところで、敢えて云うならミスマッチ、私程度の者が挑める山ではなかったという事に尽きる。アフリカやヒマラヤのようにポーターがいて、スイスのように頂上付近に営業小屋のある山であったなら、さほどの苦労もなく登れる山だろうが、頑なに入山制限をし、自然のままを保とうとするアメリカの姿勢に敬意を表するのみである。

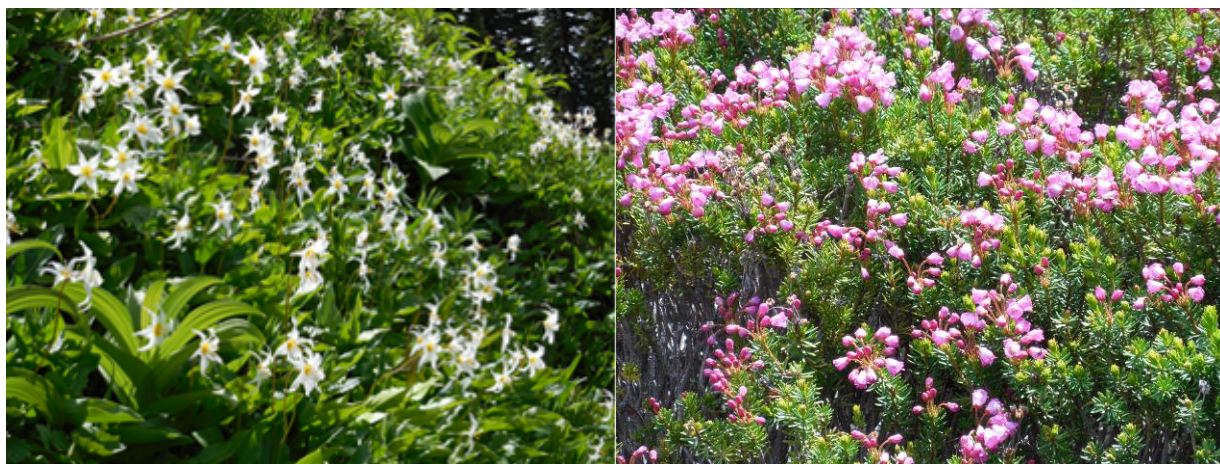
最後になりましたが、今回はFさん、Oさんという語学の達者な海外通のお二人おればこそ実現出来た山行であり、MR10の皆様及びお骨折り頂いたお二人に心より感謝致します。

■ リフレクションレイク トレイル を行く

斎藤 光子

マウント・レーニア南側の麓パラダイスには、いくつものトレッキングトレイルがありますが、5名のトレッキング班が一日目に選んだのは、湖に写るマウント・レーニアに会いたくてリフレクションレイクに決定しました。

朝10時、眩しい程の陽ざしとスッキリと晴れわたった青空に気分も上々です。トレッキング入り口は1916年建築という趣のある宿泊施設、パラダイス・インの脇、道路を挟んだ向かい側にあります。パラダイスから望むマウント・レーニアを背にして、一周8.3km、行程4～5時間のトレイルです。青空に向かって高く伸びる針葉樹の森は明るく、足元には雪解けと共に咲きだした高山の花々の群落は今が盛りと咲誇っていました。



マウント・レーニア国立公園には25の氷河があるとの事、その氷河から流れる小さな川を木橋で渡り一時間半ほどで湖に到着。静かな湖面には周りの木々と青空、そして傘雲を被ったレーニア山の姿がしっかりと映っています。この素晴らしい湖のほとりでゆっくりとしたランチタイムを楽しみ、名残惜しみつつ先に進みます。未だ雪が残る湿原には真っ白なアバランチリリーの群落、空の青と木々の緑のコントラストの美しさに始終感動をし、大満足のリフレクションレイク一周トレッキングでした。



■ Mt. レーニア スカイライン トレイル

星野 真知子

パラダイスからスカイライントレイルを歩いて目にした展望は脳裏にあれど字幕で上手く伝えることが出来ない。テント場8時、霧中の山道を走り駐車場着。この天気でも既に駐車台数は多い。ビジターセンター開館まで車中にて。標高1,650mのパラダイスは朝から雨。ビジターセンター開館と同時に入館。映画が始まり Mt. レーニア 登頂の道を歩き、なんと映像で楽々レーニア山のとっぺんに登ってきた。

10:50分発の頃には雨も治まりテントで取れなかった疲れも多少緩和されたようで出発準備にかかる。パラダイスから先ずの歩き初めは坂道が続く。朝一番で縮こまったままの体にきつくて息がきれる。前方に小高い丘が見え「あそこまで行けば水休憩」と勝手に決めて足元の可憐な花を見ながら汗を拭く。ヒョイと目標の丘に上がれば目の前にMt. レーニアがドンッと控えておる。その姿に惹かれるように歩み、足元の花をファインダーで捉えて徐々に体が目覚めてゆく。高度を増すにつれ氷河、雪渓、残雪が現われて風がひんやりと汗ばんだ体に優しい。

ショートパンツにブラスタイルのお嬢さん、日焼けと冷えが心配。長い休憩は禁物です。単独、幼児連れファミリー、高校生の仲間など、老いも若きも列を為してこの辺りはイコール高尾山？の風景を思う。お腹も空いて各自持参の物を分け合い、しばしの休憩。見上げた彼方の山の中腹に豆粒の人

形を飾ったように行列が、あそこまで上がるのかあと疲れが・・・。その上から残雪のトレイルに行く。少々ナメていた私はスニーカーで来たのでいつもより注意深く足を出す。追い越せる程の幅は無く、間合いは常に同じに歩くが列は長く続いている。分岐で脇にそれてやり過ごし、ペーター隊を組み直す。見上げた先がビューポイントか、その先に高い山は見えず雪も無い。レーニア山は雪の衣装を肩に胸に替えながら背後に、そして横にある。

レンジャーに会い、今の場所を教えて貰うと残念なことに、登りは既に制覇、キャンプ・ミューア方面への分岐も過ぎていた。これからは下り一方。速足のペーターとハイジ達はここで何枚も記念写真。右の雪渓では雪山登下行、ピッケルを使って滑落停止などの訓練中。そしてスノーボードを楽しむ姿も。

スカイラインループの真ん中を下り始めると草付けにはスカイブルーを仰いで咲き誇る花の軍団。これを見ずして写さずして下れましょうか。これはスタートラインに戻るまで時間がかかりそう。



(ペーターおじさんとハイジおばさん達の花の道トレイル)

ペーターはもう見えないがハイジ達は花、花と滝、花と空の写真に余念がない。おっと、子豚ほどのマーモット、動かない、体が重いのかなあ、ゆっくりとした落ち着きはうらやましい。アバランチ・リリーの群落に思わずシャッターの繰り返し。間もなく小滝に小橋を渡ると丁度100年前に建ったホテル、パラダイス・インの前に出た。ロングマイアーのホテルも同じ100年前、当時の写真と大

きくは変わっていない。ここはアメリカだった。

Mt. レーニアの足元で楽しい時間を過ごした。山に励まされ、空に見守られ、花に導かれたスカイライントレイルを4時間半、心から堪能した一日だった。アメリカに飛んだペーターとハイジ達、スイスとはまた違った感動でありました。

■ セント・ヘレンズ大展望

河内 達人

1980年5月18日に歴史的な大噴火を起したセント・ヘレンズ山を間近に展望する事が出来た。Mt. レーニア頂上アタック失敗のあと、周辺のトレッキングを楽しんだのだが、セント・ヘレンズ展望もその一つであった。セント・ヘレンズ山は、Mt. レーニアから南西に80km、Mt. レーニア頂上アタックに成功していたら、恐らく遠望出来た事だろう。



聞く所によると、噴火の規模は物凄いもので、付近の家や鉄道や高速道路を片っ端からぶっ壊してしまったとか、火山泥流が300万 m^3 、広島型原爆27,000個分のエネルギーと言うから恐ろしい。そのお陰で、写真の通り山の中央部分がすっぽり無くなっている。まるで磐梯山そっくりだ。Mt. レーニアが「タコマ富士」なら、こちらはさしずめ「タコ磐梯」と言うところか。標高も2,950mから2,550mへと400mも低くなってしまった。

それから36年、山体崩壊の後はまだ生々しく、山麓に積もった火山灰が雨で大きく削られている様子が見てとれる。一体何メートル積もっていたのだろう。ただ地表部の植生は徐々に回復しつつあるように見える。彼方此方に緑が見える。ただ、大きな樹は一本もない。若木だけである。

砂礫に覆われた荒れ地にもこんな花が咲いている。花を求めて沢山の虫もいる。うるさい位沢山飛んでいる。この虫を求める小鳥のさえずりも聞こえる。やがてこの地も緑豊かな森になるのだろう。100年後か、200年後か、長生きしてその頃、もう一度来てみたいものと。

■ よもやま話（ボーイング社航空博物館見学）

塚本 稔

今日はシアトル市から北に行ったエベレット市の「ボーイング社組立工場」を見学に行くため、朝飯は7時に食べ、遅い9時にタコマのホテルをレンタカーで出発。

昨日はホテルを8時に出発して「セント・ヘレンズ火山」国立公園を見学にフリーウェイを走って行ったが、シアトル市から離れて行く方向なので酷い渋滞は無かった。だが反対車線はシアトル市に向う通勤通学等の車で大渋滞の所を目撃しているため、今日はシアトル市を通過して行くので通勤通学時間帯を避けて9時に出発したのである。シアトル市は大きいので何ヶ所ものジャンクションが交わり、車が集中してくるので5車線又は6車線の道路が大混雑である。

先に行くA車に付いて行くのであるがサイドミラーを見ていると前車に接近し過ぎ、少し車間を空ければ割り込まれるし、強引に割り込んで来る車もあるので一瞬たりとも気が抜けない。口の中が乾いてくるが水で喉を潤す程度にした。出発前の打ち合わせではもっと先に行ったExit 189で下りる予定だったが、手前の185でA車がインターを出る右側の車線に変更したので、慌てて車線変更をするのは大変であったが何とか無事一般道に下りホットする。

直ぐであろうと思っていた「ボーイング社組立工場」はまだ先であった。約2時間位でボーイング社に着いたが、予定していた工場は予約してないと見学が出来ず、直ぐに見学の出来る「ボーイング社航空博物館」に行くことにした。O氏ガッカリ。

ジャンボジェット機の機体の一部や貴賓室・操縦室・ファストクラス席等の一部分も有り、エコノミークラスしか乗れなかったが、座ってみる。操縦席に座り操縦桿を動かすと副操縦席も同時に動くことを初めて知る。天井からは小型軍用機や小型自家用機が吊るされていた。ジャンボなジェットエンジン部分が展示されていたが配線やパイプが複雑に入り混じって、最初に考えた作った人達は長い年月と大変な苦勞をしたらろうと思った。



他に、戦争に使われたB29もボーイング社であると知り複雑な気持ちになった。ライト兄弟が作った様な飛行機から最新型の軍用偵察機まで展示して有ったが数は少なかった。屋上に出て見ると制作機数は3機しか作らなかったという、窓のない大きな輸送機1機が屋外の片隅に展示されていた。

「ボーイング社組立工場」で完成し、販売先の航空会社名の書き込まれた機体が外に駐機してあり、

離着陸や飛行訓練をしている飛行機も見られた。組み立て工場の大きな建物が見えたがこの建物は世界一大きく、ギネスに登録されているらしい。帰りは早い時間帯にフリーウェイを通ったので酷い混雑は無かった。行きには見る余裕も無かったシアトルの高層ビル群が良く見えたが、相当数の車が走っているので前後左右に視神経を使い、無事ホテルに帰り着くとホッと。明日はレンタカーを運転しないので安心して寝ることが出来そうです。

■ 風光明媚なオリンピック半島でのハイキング

大塚 忠彦

〔期日〕 2016. 07. 28～31 〔参加者〕 大塚、河内、斎藤光子、迫畑、古林、星野

日本よりは涼しいとはいえ日中は猛暑のヒートアイランドであるシアトルからバスで4時間、海と山と湖の小さな港町ポート・エンジェルズ、朝夕は薄手ダウンパーカーが欲しいくらいの冷涼で爽やかな気候であった。この町はワシントン州最北西部オリンピック半島の北海岸中央部にあり、ファンデフカ海峡を挟んだ目と鼻の先はカナダのバンクーバー島である。ダウンタウンは海岸に貼り付いているような狭い街であるが、山側の丘陵地にはゆったりとした住宅街が拡がりそのすぐ奥には今回の我々の目的地オリンピック山塊のジャンダルムが深い雲に覆われて聳えていた。主要産業は林産、水産、観光。人口約2万人の小さいが美しい港町であった。



(ポート・エンジェルズ 対岸はカナダ)

さて。どちらかと言えばハードなマウント・レーニアが終わった後に、Fさんは第2弾としての優雅なハイキングを用意してくれていた。ワシントン州随一の風光明媚なオリンピック半島での3日間のハイキングであった。因みに、ワシントン州には、マウント・レーニア、ノース・カスケード、それにこのオリンピックの3つの国立公園があるが、その中でも一番人気が高いのがこのオリンピック国立公園だそうで、年間入園者数も他の二つに比べて桁違いに多い（年間約3百万人）。



こちらはバスなどの公共交通機関が殆ど無いので、タコマでレンタカーを返した我々には足が無い。丁度良い塩梅にFさんがネットで手頃な現地の車付のガイドを予約してくれていて、彼女の車に毎朝ピックアップして貰えば、景勝のハイキングコースや観光地を毎日案内してくれると言う寸法。全くの大名旅行。レーニアやシアトルではAさん、Tさん、Sさんが転がすレンタカーで道を探しながら行かねばならず、運転者は勿論のこと同乗者も疲れたものだったが、こちらではガイドが運転する車に乗ってうたた寝でもしていれば、3～4時間で目的地に連れて行って貰えるという寸法。彼女が運転しながら案内してくれる英語の説明も左の耳から右の耳へ抜ける子守唄という塩梅。彼女は、ナチュラリストの資格を持ったガイドで、個人で小さなツアー会社を営んでいる。なかなか素晴らしいガイドであったので、今後この方面へガイドハイクをされる方は、彼女



の会社に依頼されるとよい。

名前は Ms. Carolyn Wilcox. “ネエちゃん”と呼ぶには少々麗齡を重ねているように見えるが、活発でキュートな顔立ちの美人であったので、以降は Carolyn ネエちゃんと呼ぶことにする。ご参考までにネエちゃんの会社名や URL を稿末に付記した。

以下、日程順にハイキングの様子を記す。次頁の地図でトレイルの位置を①などで示した。また、各トレイルの情報は稿末に付記した。

《①》 Hoh Rain Forest (Hall of Mosses Trail)

さて、オリンピック国立公園での初日。朝 8 時にポート・エンジェルスでピックアップして貰って、国道 101 号を一路西へ。途中には琵琶湖と浜名湖を足して 2 で割った大きさの風光明媚なクレセント湖（三日月湖）が山々の深い影を映し、また道路脇にはナントカ松などの大木が鬱蒼と茂っていて、如何にも森と湖のアメリカの原生林という趣が深かった。ワシントン州の愛称が Evergreen State であることも頷ける。アメリカの原野には砂漠や岩だらけの荒野が多いが、ここは全て緑の樹海であった。

本日の行先はオリンピック半島の中央部に位置するホー・レイン・フォレストと呼ばれる温帯雨林のハイキングである。この温帯雨林は、暖冬・冷夏・多雨というこの地の気候がもたらしたもので、ここの巨大な針葉樹林は世界の温帯雨林の中でも典型的なものだそう。Carolyn ネエちゃんは動植物が専門のナチュラリストであるから、樹木や草花の名前や同じ針葉樹でも僅かに違う異種の区別などを説明してくれたが、その方面に全く無知の小生には猫に小判であった。この温帯雨林ハイキングの目玉は、天を突くような針葉樹の巨樹が鬱蒼と茂り、その世代交代の様子が至る所に見られることであろう。即ち、堂々と枝を上げて今を盛りの壮年期の巨樹の足元には今は朽果てた爺さん世代の巨木が横たわっていて、その背中からは孫の世代の若い芽が芽吹いているのが観察できる。ここの樹木の樹齢は 500 年程度であるそうだから、祖父母から孫までの 3 世代の 1500 年間程度の世代交代と森林の更新再生の様子が如実に観察できるのである。5、6 本の巨木が直線上に綺麗に並んで生えているという奇妙な（？）生え方は、倒れて横たわった爺さんの大木の上に着床した何人かの孫が爺さんの栄養分を貰って成長した姿であろう。爺さんを nurse log とか、nurse bed と言うそうだ。乳母の意。また、ここのもう一つの名物は樹木に垂れ下がった苔（サルオガセに似た苔）である。



(nurse log 上に一列に並んで生えている孫樹)

(樹に垂れ下がっているサルオガセ)

ここのトレイルの一つに“Hall of Mosses Trail”(苔の回廊)というのがあり、我々もこのコースを歩いた。看板によればこのようなハイクは、“Trail of Senses Interpretive Hike”と呼ばれ、心を澄まして全身を五感にすれば、植物や動物が織りなす森の生態の息吹を野生動物や鮭と同じように感じることができるので、あなたも太古の昔の“動物”に戻った感覚を体験してみて欲しいと書かれていた。

(オリンピック半島、
オリンピック国立公園は
濃く塗られた地域 ⇒)



《②》 Cape Flattery

昨日は山中の溪谷ハイキングであったが、2日目の本日は趣を変えて海のハイクと洒落こんだ。オリンピック半島の最北西部の岬はフラッター岬と呼ばれ、ここでファンデフカ海峡が太平洋に出る。この岬は、オリンピック半島の最北西部であるばかりでなく、米国本土の最北西ポイントでもある。

海洋性の針葉樹が鬱蒼と茂った深い森林を抜けると、岬の断崖絶壁に出た。海蝕によって浸食された岩の絶壁や海蝕洞窟が足下に見え、その上に乗り出すように展望台の木柵が危うく乗っかっている。足を踏み外せば、白波が砕け散っている千尋の岩礁へお陀仏間違いなし。How fearful! Oh my God.

足下の先に横たわっている小島には、米国で最初に設置された灯台が見えた。Carolyn ネエちゃんが望遠鏡を島に向けて何やら目標を探している。トド10頭くらいが寝ころんで日光浴をしているのをレンズの向こうに見つけた。トドのハーレムだという。トドだけではなくクジラも遊泳しているそうだが、本日は現れなかった。鳥は海鵜が断崖絶壁に巣を作っていて、白い糞が積み重なっているの、直ぐに探せた。何百羽という黒い鵜が屯していた。



(Cape Flattery、対岸の山々はカナダ。本写真のみ

Washington Trails Association HP より引用)



(海蝕洞窟 How fearful! Oh my God. 白色は鵜の糞)



(足下に浮かぶ Tattoos Island 灯台は米国で第1号設置灯台、自動化されているが今も現役。岩礁にトドが見えた)

このフラッター岬一帯は、鯨やアシカや鮭や鳥を狩猟して生活していたネイティブアメリカンが太古の昔から住んでいた地域で、今はインディアン保護居住地域に指定されている。岬の入り口に Makah Museum/Cultural and Research Center という博物館があり、彼らの伝統文化が展示されていた。





(博物館にあった彼等のモチーフ。下に鯨、上は鷲、両横は？)



(付近の海浜休憩所の柱に刻まれていたモチーフ。Hobuck Beach)

《③》 Hurricane Ridge

さて、初日、2日目は山とはあまり関係ない場所でのハイキングであったが、最終日はいよいよ今回のメインイベント、オリンピック山塊に分け入る日となった。“分け入る”と言っても、本日の午後にはタコマに帰らなくてはならないので、使える時間は午前中のみ。よって、Carolyn ネエちゃんはオリンピック山脈の好展望台として知られているポート・エンジェルス の裏山、ハリケーン・リッジのビジターセンターからハリケーン・ヒル 1,755m 頂上までのトレイルを選んでくれた。

早朝6時半にピックアップ。車はポート・エンジェルス の丘陵住宅地を抜けて、ウネウネと曲がりくねった山道に入った。ポート・エンジェルス の裏山と言っても、ハリケーン・リッジのビジターセンターまで2時間ほど掛かった。

ここから、ハリケーン・ヒル 1,755m 頂上まで約 3km、標高差 200m を登るのである。標高差はたったの 200m ではあ



るが、トレイル最初の部分は急坂で、(ポート・エンジェルス の港から見たハリケーン・リッジ)
Carolyn ネエちゃんの元気で大きなコンパスにはダックスフントの我々日本人は付いて行けず息が弾んだ。

登るにつれて展望が開け、オリンピック・マウンテンの盟主オリンパス山 2,432m や、その東側に連なるオリンピック・ウィルダネスの連嶺などが手に取るように眺められた。標高は左程でもないが、雪を冠った奥山連山のどっしりとしてかつ巍峨たる山巔は流石アメリカと思わせるに充分だった。



(オリンピック山塊 中央右端が盟主オリンパス山 2,432m)

オリンピック山塊にも奥深くまで登山ルートが付いているが、これらの山に登るには相当の日数と衣食住の装備を要するだろう。また氷河もあるので、ザックの重量はマウント・レーニアの場合を越えるかもしれず、何れにしても私などはお呼びではなかろう。今回の我々はこれらの山々を望遠するだけである。

道々、Carolyn ネエちゃんは立ち止まって望遠鏡をどこかに合わせているが、そこには必ず動物が居た。我々の目には全く見えないが、ナチュラリストのネエちゃんにはちゃんと見えているらしい。



(ハリケーン・ヒルのトレイルとお花畑)

草花も珍しそうなものが沢山あって、女性陣は喜んで写真を撮っていた。

ハリケーン・ヒルの頂上は、南側のオリンピック山塊と同時に、逆方向の北側のポート・エンジェルスやフアンデフカ海峡、対岸のカナダの山々も見えた。頂上の岩に座って軽食休憩。足元をリスが何匹も走り廻っていた。足下のお花畑ではマーモットが朝食の最中であつた。何かの花を喰っているらしいが、時々立ち上がって回りを見渡していた。



ハリケーン・ヒルで出会った動物達

写真以外に、野兎、雷鳥、鷺、種々の小鳥などが暮らしている



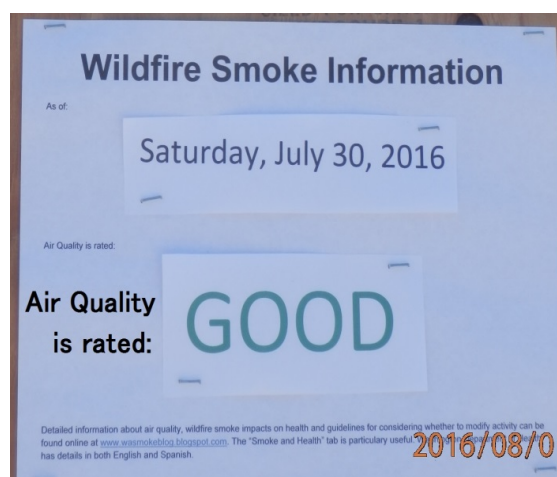
下山の折、オリンピック連山が薄墨のように霞み、薄い層雲が棚引いていたので、Carolyn ネエちゃんに貴国ではあのような雲を何雲というのかと聞いてみたら、あれは雲ではなく、先日発生した山火事の煙であると教えてくれた。山火事の原因は全て落雷だそうだ。只今この山域では3箇所が山火事で燃えている最中であるとのこと。山火事は森林再生のきっかけでもあるので消火などは行わず、煙などのウォッチだけを行っているそうだ。山火事は10月頃まで燃え続けるとのこと。何とも広大なアメリカらしい。このトレイルでも各所で立ち枯れ山が見えたが、これらも全て過去の山火事の跡であった。



(山火事の煙棚引くオリンピック山塊エルワ溪谷、中央のピラミッドは Mt. Anderson2, 231m)

帰途、ビジターセンターの掲示を見ると、ちゃんと「山火事情報」が掲出されていて、「山火事は、何千年も続いてきた森林の生態システムの連環であって、そこに暮らしている動物や植物はズットそのような環境の中で生活・進化してきた。従って、山火事に対しても人間が消化活動などの人工の手を加えてはならない」、「今は高温で乾燥している時期なので山火事の勢いは増大の一途を辿るが、やがて秋になって冷湿な気候になれば自然に収まって行く」などと書かれており、また、「本日の山火事煙情報：自然環境及び人体に影響無し」という掲示もあった。

流石、『自然保護の父』、『アメリカ国立公園の開祖』ジョン・ミュアーが輩出した国だけのことはある。“自然”という環境に対する考え方が徹



底していることもさりながら、ゴチャゴチャと小細工を加えないという大らかさがいいではないか。

このオリンピック半島での3日間のハイキングは、山登りという範疇からは外れていたが、豊かでありのままの大自然に浸れた旅であった。

———（補記）———

（1）Carolyn ネエちゃんのガイド会社 Experience Olympic LLC (Port Angeles, WA)

URL: <http://experienceolympic.com/>

（ご参考）今回のガイド料金＝車、昼食付で3日間5人分合計US\$1,500（チップ別途）

（2）各トレイルの情報（距離、登高標高差、コース状況の順）

①Hall of Mosses Trail (Hoh Rain Forest) 1.3km ループ、30m、山道散策コース

②Cape Flattery 2.5km ラウンド・トリップ、60m、海岸断崖上の山道散策コース

③Hurricane Hill 5.1km ラウンド・トリップ、210m、稜線山道コース（展望良）

（3）Olympic National Park, Olympic National Forest、同 trail 等の関係情報源

■Olympic National Park 公式 HP サイト <https://www.nps.gov/olym/index.htm>

■Olympic National Forest 公式 HP サイト <http://www.fs.usda.gov/olympic>

（註）②の Cape Flattery はオリンピック国立公園内のトレイルではなく、
Olympic National Forest という農務省管轄下にある公園のトレイルである。
米国の自然公園には、内務省管轄の National Park と農務省管轄の
National Forest がある。

■Washington Trails Association HP サイト <http://www.wta.org/go-hiking/hikes/>

米国ワシントン州内の約 4,000 トレイルの案内情報が掲載されている。

■ よもやま話 （ポート・エンジェルス／オリンピック公園）

迫畑 勝三

ポート・エンジェルスは地元の人々にとっては避暑の地ではないかと思われる。観光客が多く、宿泊施設が海岸段丘の上に立地し、ウミネコが海風に気持ちよさそうに舞うという田舎街であります。段丘からの見晴らしが素晴らしいこと、特に夕方のサンセットは圧巻であります。夏休みで多くの子供達が喚声を上げて水遊びしている姿がサンセットによって影踊りをしているように見える。



海の遥か向こうの青く薄い山々はカナダの国という。ここまでやって来たという感慨とアメリカの広大さに驚きです。避暑地であるので、マリンスポーツも盛んで、ボートの係留している岸壁が賑やかであるかと思ったら、いたって静か。片隅で係留されている木材の上で北の海からやってきたアザラシ数頭を見ることが出来た。これもガイドの案内があつてのことです。

夕食のため、段丘から街に下りるのでありますが、食べ処は結構あります。しかし、それ以上に客数が多いので店の前では混雑していた。運よく、海辺の近く、炉端焼き風のレストランで食事となった。この時は、全員が海鮮料理で一決。新鮮なカニ、貝等などにかぶりつく感じで食べた。旨かった。現地生産で現地消費だから安いのかと思ったら、その反対。新鮮が売り物だから割高の料金。アメリカで買い物をして感じたことだが、日常生活に必要な品々が高いということ、これも当国と同じかな。3泊4日のポート・エンジェルスでの宿泊は、私にとっては旅の気分を味わわせてもらった。そして、地元の人々の生活の一部を垣間見ることができた。スーパ



ーに行きジェスチャーで買い物をさせていただいたり、珍しい果物、野菜類を見たまわったりして楽しんだ。一方、少しずつ日本食のうどん、ソバ、味噌汁が恋しくなってきた。油と甘さたっぷりの料理には閉口したところでもあった。

《オリンピック公園にて》

オリンピックという名前であるが今、開催されているオリンピック大会と関係があるのかとガイドに尋ねたところ、関係ないということ。国立公園にある山嶺の名であると分かる。この公園はあまりにも広大であり、何が特徴かということをガイドが説明するのですが、言葉の壁で理解できず、3箇所を案内された。その後分かったことですが、この公園は自然の力を最大限に育み、人為的なものは最小限にしているということでもあります。

針葉樹（ヒノキ種）の樹齢500年～1,000年の巨木、巨木。これが真っ直ぐで高さ50m～70mである。樹皮は盛り上がり厚く長年の風雪は物ともせず、と言う感じであります。寿命が尽き倒木となり苔むしたところからは幼木がたくさん育っていることが見える。

摂理に沿うことの清々しさと、巨木のグリーンシャワーを浴びることとなった。このように植生が豊かであるということは、そこに住む動物の生息も豊かであるということでもあります。ケープ・フランタリーでの「トド」の群れ、ホー・レイン・フォレストのハイクでは「マーモット」と出会う。体長40cm～50cm位で、よく岩の上で立ち手でエサをモグして食べる様子、ひょうきんそのものです。こんなところだと思う「雷鳥」の親子、それにムースの群れを望遠鏡越しに見られたこと、感激そのものでありました。

ポート・エンジェルスは夏の花で飾られ、時々キャンピングカーが往来している。静かな街である。ガイドのお礼と心残りを惜しみながら帰路につく。



■ 評価と反省

古林 宏

ほぼ2週間に亘る滞在では、単に登山をすると云うことでなくアメリカの自然を現地の人と同じ視点で観察し、それらを楽しむことが出来たように思う。

アメリカ大陸の北西部に位置するロッキー山脈添いのコロラドやワイオミング、それにワシントン州などは自然環境に恵まれ、自然愛好家達が好んで行きつける場所となっているようだ。とりわけ今回のレーニア国立公園とそれに隣接するオリンピック国立森林公園には難度の高い山があり、一方で海沿いの山岳地帯は温帯雨林にはぐくまれ、多様な植生の樹林帯と変化に富んだ奥行きのある自然に囲まれている。

我らシニア訪米登山隊は、レーニア山では全米で一番多いという氷河やクレバスのある雪溪に挑

んで敗退をした一方、その裾野では一面を覆い尽くす高山植物のフラワートレッキングを満喫することができた。本土と切り離され孤立した地形のオリンピック公園では、多くの植物種、動物種が特異な生物が生息している海辺沿いの「生物圏保護区」なる所を、聞きなれない英単語を聞き流しながら目に映る新鮮なウォーキングを体験することができた。

《アメリカ人の自然に接するあり様》

シリウスの会としてアメリカ山行はハワイを含めると今回が3度目である。これまでも感じたことであったが、一番印象に残ったことといえばアメリカ人の登山に対する考え方というか姿勢であり、更に云うと自然と向き合う人々の‘あり様’を改めて感じ取った、と言うところだろう。

アメリカにおける自然公園での人々の過ごし方は、先ず車社会を反映して車ベースのアクセスとなっている。キャンプ場での大型キャンピングカー存在や、家族単位の行動が主である。しかし、どこかの車道も感心なことに、多くは歩道兼自転車用道路がきちんと併走しているのに気付いた。また、めったに通らない歩行者だが、横断する人が居れば優先的に通してくれるマナーの良さには、登山者である歩行者として、さすが車先進国だなと感心したものだった。

アメリカでは、国立自然公園法が制定されて100年を記念する年に当たるというが、自然をエンジョイするにはその前提として、自然が良い状態で保持されていなければならないと云う、自然環境を優先保持する概念が強く醸成されているようだ。公共機関が土地の管理権を有する自然保護のあり方が環境保全に優れていることの理解ができる。

山小屋の無いことやポーターが居ないのは、それが自力で登るのが登山の本来あるべき姿ということなのだろう。入山料を取られても、その費用がきちんと登山道の保全や山岳警備員の費用に当てられていることが分かると、協力するのが当然という気持ちになるし、入山制限されるのも、いい環境を保つには必要な手段なのだと理解ができる。多くのボランティアがキャンプ場や登山道の保全に協力していると聞く。マウント・レーニアに登る際にトイレの処理をするためのブルーバッグというビニールの袋を買うことになった。トイレは山を汚さないために自分の糞便は全て持ち帰りだとして、そのための袋代金を支払ってザックに仕舞った。

《自前のガイドレス山行で計画》

今回は前回のグランド・ティートンと同様に、できるだけ自前で準備をして、結果論でもあるがガイドレスでの山行にしよう、ということにして、スノーフィールドまで登って、そこで第1キャンプ、さらにその上のキャンプ・ミューアで第2キャンプをする計画を立てた。しかしながら実際には20キロを超える過負荷が重荷となって早々の退却という羽目になってしまった。頑張って登った人も強風とホワイトアウトという悪天候と、トレースが消えて見えなくなってしまうという悪条件が重なって、安全を期して早期の撤退となった。帰りの足を無くしてヒッチハイクした組などの茶番劇も終わってしまえば楽しい思い出であり、可笑しもある珍道中だったということになった。後日、現地の登山家から「この山は他の山とは違いますよ、ガイド無しでは登れません」と、いわれたことが未だに心に残っている。

《左ハンドルでのドライブ》

今回のハイライトのひとつは左ハンドルでのレンタカーによるドライブだった。山登りとは関係無いが、自前の手作り登山で現地にアクセスする為にはこの方法を選ぶしか手段は無かった。運転のできる人に国際ライセンスを取って貰って空港でレンタカーを借りるのは良いが、皆さん左ハンドルで高速道に入るのは初めてである。その神経の張りようは普通ではない。登山のために来たとは言っても、の最初に超えなければならない大きな山がいきなり立ちはだかった、と言う次第。英語のナビも翻訳がついているというのが機械翻訳で、訳のわからない日本語の中身は聞くに堪えない。日本から持参したスマホが何とかお役に立って、空港からいきなり6車線の高速道に分け入ることになる。その後の出来事は紙面に書き尽せないなので省略させていただくことにする。

《オリンピック国立公園》

名前を調べていると面白いことに出くわす。標高という山の高さ。オリンピックで知られるオリンポス山はギリシャの最高峰で海拔2,912mの山には12神が住まわれるという。同名の山を調べてみると太陽系での最高峰が火星にあってこの名前がオリンポス、標高が何と2万5千メートルだとか。

標高という高さの概念は飽くまでも相対的なもので、どこから図るかで決まってくる。そう、標高というのは一般的に海面から図る高さを云うから、エベレストが世界で一番高いということになっているが、地底である海底から図ってみるとハワイのマウナケアが10,203メートルあって世界一の標高ということなのだ。

2012年にシリウスのメンバーと南米はボリビアにあるワイナポトシ山に行ったが、空港に降りると、そこは既に標高が4,000メートルの地点、登山に出発すると直ぐに5,000メートルの高原地帯を歩くことになった。森林限界をとっくに超えている筈なのだが、何故か高い樹木が生えているし、富士山より高いチチカカ湖では魚も泳いでいた。今回のマウント・レーニアは標高が4,392メートルということだが7,000メートル級のアコンカグアの様な強風とクレバスに遭遇だ。

今回訪れたアメリカ西海岸にあるワシントン州のオリンポス山は2,428mでその名前から半島をオリンピックと名付けたということだ。オリンピックというからその語源はどこにあったのかと不思議に思っていたが、イギリス人航海者ジョン・ミアズという人がその美しさをギリシャのオリンポス山になぞらえたものであるものと判った。

《費用概算》

かかった費用については概算で多い人では総額40万円ほど、少ない人で30万円程度だったようだ。個人別に多少の差がついたのは15日間と10日間の2つのスケジュールがあったことと、少ない人の理由はテント泊が主で、ロッジかホテルには4泊しかしていないことにもよる。

入山費用やガソリン代、食費などの諸経費などは持参したドルでの支払いをし、全部で1,000ドル以内に収まったようだ。

<u>＜1人当たり費用概算＞</u>	第1班	第2班
航空チケット代金	167,000 円	
ホテルなどの宿泊代金	31,000 円～50,000 円	114,000 円～138,000 円
レンタカー代金	22,000 円	22,000 円
ガイドサービス料金（チップ料込）	—	31,000 円
諸経費 ルーターレンタル代 国際免許取得代 日本からの食料代など	5,000 円	
諸経費 食費など雑費	50,000 円（500 ドル）	75,000 円（750 ドル）
計	275,000 円～294,000 円	414,000 円～438,000 円

2016年8月25日